

印刷は横浜にある福音印刷所に行つてすることにした。そこ以外には、朝鮮文活字のある所がなかった。<sup>(16)</sup>

文芸雑誌を発行した朱耀翰だけではない。詳しくは第六章で述べるが、一九二〇年代はじめに日本で社会主義者として活動し、朝鮮語の社会主義雑誌『大衆時報』の発行に関わつた鄭泰信も、コミンテルンに提出した報告書（ロシア語）で、印刷所について次のように言及している。

日本で朝鮮の活字を持つ活版印刷所が横浜でしかみつからなかったため、この朝鮮語新聞の出版においては、多くの困難を露呈した。<sup>(17)</sup>

引用文から、当時の日本には、ハングルの活字を持つ印刷所が横浜の「福音印刷所」しかなかったことが窺える。そして、実際に朝鮮人留學生の出版物の奥付を確認してみると、「横浜市山下町百〇四番地」の「福音印刷合資会社」が、一九一四年から一九二二年まで朝鮮人留學生や朝鮮人活動家の出版物を数多く印刷しているのである。具体的に福音印刷合資会社で印刷されたことが確認できる朝鮮人の出版物は、学友会の機関誌『学之光』、朝鮮女子留學生親睦会の機関誌『女子界』、同じく朝鮮女子留學生を中心に発行された家庭雑誌『女子時論』、朝鮮YMCAの機関誌『基督青年』と『現代』、文芸雑誌の『創造』『緑星』『三光』、朝鮮人社会主義者が日本で発行した雑誌『大衆時報』と『前進』の一〇種類である。これに京都在住の留學生を中心として京都で発行された『学友』と、『大衆時報』の姉妹紙で日本語で書かれた『青年朝鮮』、朝鮮、中国、台湾、日本の知識人が参加した雑誌『亜細亜公論』を加えれば、一三種類となる。これは一九一四年から一九二二年の間に日本で創刊された朝鮮人の出版物の大半を占める。<sup>(18)</sup> 期間、種類、量のいずれの観点からみても、一九二五年に設立される朝鮮人経

営の印刷所である同聲社を除いて、福音印刷合資会社は戦前の日本で最も多く朝鮮人の出版物を印刷していた会社といっても過言ではない。これら福音印刷合資会社で印刷された朝鮮人の出版物は、『学之光』をはじめとしてしばしば内務省の検閲により焚禁処分となったが、福音印刷合資会社自体も同様に官憲からマークされる存在であった。

朝鮮人留学生の印刷所であった大韓興学会印刷所を失い、日本の印刷所の協力なしには朝鮮人留学生の出版活動が成立し得なかったことを考えれば、長期間にわたって多くの朝鮮人の出版物を印刷していた福音印刷合資会社は極めて重要な存在といわざるを得ない。以下、本節では、福音印刷合資会社と、その設立者の村岡平吉がいかなる会社・人物であり、なぜ朝鮮人留学生と結びつき、印刷業務を受け持つようになったのかを詳しくみていきたい。

## (2) 福音印刷合資会社の設立経緯

日本に活版印刷の技術が伝わったのは、明治に入って間もない一八六九年に、幕府の元通詞であった本木昌造が、上海にある美華書館の館長ウィリアム・ガンプルを長崎に招聘し、四カ月間の講習を受けたことにはじまる。美華書館とはアメリカ長老会の宣教師が上海に設立した印刷所であり、キリスト教関係だけでなく、東アジアにおける活版印刷術の伝播に大きな役割を果たした印刷所であった。以降、ウィリアム・ガンプルによって、本木を媒介として日本に伝えられた活版印刷術は、東京、横浜をはじめとする日本各地へ伝播し、明治のはじめに多くの印刷会社が設立された。本木の直系の弟子である平野富二が東京築地で開業した東京築地活版製造所（一八七三年創業）や、佐久間貞一によって設立された秀英舎（一八七六年創業、現在の大日本印刷株式会社）などは、日本の活版印刷術の発展を主導する企業となった。<sup>(19)</sup>

村岡平吉が一八九八年に設立した福音印刷合資会社も、日本の印刷業界を、その創業地である横浜において主導した企業のひとつである。ただし、東京築地活版製造所や秀英舎と大きく異なるのは、福音印刷合資会社がキリスト教出版物の印刷を専門とすることで発展していったという点である。例えば、一九一〇年に横浜で出版された『横浜成功名譽鑑』の「印刷彫刻及写真繪葉書商」の項目では、村岡平吉は横浜の印刷製本業において最古の経歴を持ち、「我国にて行はるる基督教印刷物に其署名を見ざるは稀」と評価されている。<sup>(20)</sup>以下、福音印刷合資会社の設立と発展の過程を、朝鮮との関連にも留意しつつ追っていこう。

福音印刷合資会社の設立者・村岡平吉は一八五二年に武蔵国橘樹村小机（現在の横浜市港北区）の紺屋に生まれた。開港以来、横浜を中心に活動していたアメリカ長老会宣教師ヘボン一派による小机布教に遭遇したことを契機として、一八八三年に横浜の住吉教会（ヘボンが開設した伝道所を起源とする教会で、一八九〇年に指路教会に改称される）において、アメリカ長老派宣教師ノックスより受洗した。一八九四年に指路教会の長老となって以降、死去する一九二二年五月まで、福音印刷合資会社でキリスト教出版物を印刷する傍ら、指路教会の長老職を務めた。それゆえ、村岡平吉は「バイブルの村岡さん」と呼ばれていた。

以上は、キリスト者としての村岡平吉の経歴である。<sup>(21)</sup>次に、印刷人としての村岡平吉の経歴であるが、これに関しては、村岡平吉が死去して間もない一九二二年五月二〇日付の指路教会の機関紙『指路』に掲載された「長老村岡平吉逝く」という記事が最も詳細である。少し長いが引用しよう。

「村岡平吉は」夙に印刷事業の文化に欠くべからざるを覺り、明治初年外国新聞社に職工として斯業を研究し明治十年当時唯一の佛蘭西新聞社に入り、久しからずして上海に転じ数名の日本職工を引率し工場長として大に日本職工の優秀なる技術を彼の地に矜つた。明治十七年帰朝し東京印刷の分身なる横浜製紙分社に入り

### (3) 思想的急進化と金若水グループとの合流

第四章で述べたように、三・一独立運動が一段落すると、朝鮮内では独立運動の理論的模索期に入り、知識人によって新思想が積極的に紹介されはじめた。この点は日本の朝鮮人社会においても同様であった。そして、その担い手は、二・八独立宣言が在日本朝鮮基督青年会館で行われたことに象徴されるように、社会運動への自覚の芽生えた朝鮮YMCAの主要メンバーたちであり、一九二〇年六月に朝鮮YMCAの会計に就任した卞熙璐もそのひとりであった。

従来、朝鮮YMCAは機関誌として、一九一七年から『基督青年』を発行していた。原則月一回の発行であり、聖書やイエスなどキリスト教に関する内容が中心であったため、発禁処分を課されることもなく、一九一九年一月までに一五号を発行した。一九二〇年一月に誌名が『現代』に改題されると同時に宗教色が薄れ、近代思想の紹介記事が中心となった。誌名と性格が大きく変化したのは、朝鮮YMCAのメンバーたちが、自分たちが生きている「現代」という時代を深く理解し、自分たちが立っている位置をよく知ったうえで、今後進むべき方向を見定める必要があると考えたからであった。<sup>(10)</sup> その思いは卞熙璐も同様であった。卞熙璐にとって、植民地に転落した朝鮮の民衆に何よりも必要なものは知識の充足であり、時代に適合した思想を社会に普及させることが知識人に求められた役割であった。<sup>(11)</sup> 『現代』という誌名には、時代に適合した思想の探求という思いが込められていたのであろう。

それでは、当時、卞熙璐が『現代』などの雑誌を通して紹介しようとした思想はどのようなものだったのだろうか。表8は、一九一九年末から一九二一年のはじめにかけて卞熙璐が執筆した記事を執筆順に配列したものである（卞熙璐は記事の末尾に執筆日を明記することが多い）。

表8から分かるように、卞熙璐は一九一九年一月二日から一九二〇年五月六日にかけて、月一本に近いペ

表8 卞熙路執筆記事一覧 (1919~1921年)

| 記事名                              | 掲載媒体      | 掲載日         | 執筆日         |
|----------------------------------|-----------|-------------|-------------|
| 労働問題에 대한 余의 見聞<br>(労働問題に対する余の見聞) | 『現代』第1号   | 1920年1月31日  | 1919年11月22日 |
| 社会와 經濟 (社会と経済)                   | 『現代』第2号   | 1920年3月2日   | 1920年1月31日  |
| 新人의 声 (新人の声)                     | 『現代』第3号   | 1920年3月20日  | 1920年2月25日  |
| 民本主義의 精神的意義<br>(民本主義の精神的意義)      | 『現代』第5号   | 1920年5月10日  | 1920年3月12日  |
| 労働者問題의 精神的方面<br>(労働者問題の精神的方面)    | 『共済』第1号   | 1920年9月     | 1920年5月6日   |
| 랴셀의 理想의 一節<br>(ラッセルの理想の一節)       | 『現代』第6号   | 1920年6月18日  | 1920年5月28日  |
| 労働運動의 精神<br>(労働運動の精神)            | 『学之光』第22号 | 1921年6月21日  | 1920年11月7日  |
| 카-르・마르크스略伝<br>(カール・マルクス略伝)       | 『現代』第8号   | 1920年10月30日 |             |
| 카-르・마르크스略伝 (二)                   | 『現代』第9号   | 1921年2月5日   |             |

ースで論説を執筆している。また、『現代』だけでなく、学友会機関誌『学之光』や、朝鮮内で発行されていた『共済』にも寄稿しており、この時期にこれだけ多くの論説を執筆した事例は、朝鮮内の知識人を含めてもほかには確認できない。

卞熙路が執筆した論説は、主に労働問題、民本主義、ラッセルの三種に分類することができる。

表8の「民本主義の精神的意義」(民本主義の精神的意義)、「랴셀의 理想의 一節」(ラッセルの理想の一節)は、翻訳によって民本主義やラッセルの思想を紹介したものである。<sup>(112)</sup> 後者の執筆日(実際は抄訳なのだが)は一九二〇年五月二八日となっているが、底本であるラッセル著・松本悟朗訳『政治の理想』は一九二〇年二月に出版されている。わずかに数カ月間にラッセルの新著を抄訳していることから、朝鮮内の知識人と同様、卞熙路もラッセルに着目していたことが窺い知れる。

さて、この頃、卞熙路は労働問題に関しても精力的に論じたが、資本家階級への期待が込められ

ており、労資協調的な主張をしているのが特徴である。デビュー作の「労働問題에 대한 余의 見聞」(労働問題に對する余の見聞)では、労働問題を「社会の大多数を占める無産者を解放する方法を研究すること」と定義したうえで、その解決方法として、過激主義、社会主義、職工組合主義、温情主義などがあることを解説した。<sup>(13)</sup>そして、卞熙瑢は「労働者問題의 精神的方面」(労働者問題の精神的方面)で、労働問題解決には資本家の同情が必要であり、資本家の同情を得るためには労働者が社会的献身の觀念を養う必要があるため、労働者を対象とした訓練、施設が必要であるとの見解を示した。<sup>(14)</sup>

卞熙瑢の論調が変化してくるのは、一九二〇年一月七日に執筆した「労働運動의 精神」(労働運動の精神)からである。『労働運動(第一次)』に掲載された大杉栄の同名の論文の抄訳を通して、労働運動は資本家に対する奴隸的生活からの解放を目指す、労働者の人格確立運動だと主張し、<sup>(15)</sup>資本家階級に対する期待を払拭した。執筆日は不明であるが、一九二〇年の末からは、マルクス主義を理解しなければ「現代的生活をしていても、現代を理解できない」としてマルクスの略伝の連載も開始した。<sup>(16)</sup>マルクスの生い立ちや活動を羅列しただけの記事ではあるが、これは現存している史料のなかでは、朝鮮語による最初のマルクス伝である。

こうした一九二〇年末からの論調の急進化にともなうて、一九二一年からはコスモ俱樂部、曉民会に出入りするなど、卞熙瑢は日本人社会主義者との接触を深めていった。そして、同年の春、三・一運動後から朝鮮内で活動していた金若水、鄭泰信と合流し、さらに元鐘麟を加えて、社会主義雑誌である『大衆時報』を創刊したのであった。活発的な啓蒙活動を展開するために、かねてから新しい言論発表の場を作りたいと考えていた卞熙瑢にとって、『共済』の編集と発行を主導していた金若水、鄭泰信との合流はまたとない機会であった。一方、金若水らにとっても、日本での活動基盤を持ち、いちはやくマルクス伝を執筆していた卞熙瑢のような人物は必要不可欠であったから、両者の合流は必然的であったといえよう。

これまでの卞熙琫の活動経歴を勘案すれば、彼を編集人として『大衆時報』が創刊されたこともまた必然的であつたように思われる。すなわち、金若水、鄭泰信、そして一九二〇年に来日した元鐘麟は、日本で出版物を発行した経験がなかった。反面、編集人の経験こそなかったものの、卞熙琫は二・八独立宣言以降に日本で最も活発に言論活動をしていた人物であつた。さらに、『学之光』の編集委員として福音印刷合資会社に入入りしていた崔承萬は、一九一九年二月二四日の独立宣言書配布や黎明会第四回例会で活動をともした間柄であり、福音印刷合資会社の植字工をしていた廉尚燮は、ともに大阪での独立宣言書の配布を計画した盟友であつた。『大衆時報』を創刊したメンバーのなかで、卞熙琫が福音印刷合資会社と最も近いところにいた人物であつたのは間違いないだろう。

もともと、前述したように『大衆時報』は朝鮮人が日本ではじめて発行する社会主義雑誌だったため、当局の警戒は厳しく、『大衆時報』創刊号は印刷所で押収され、発禁処分となつた。臨時号の編集後記では、自身の編集経験の少なさと、細かな点にまで注意を払つて編集することができなかったことを悔やんでいる。<sup>(19)</sup>以降も、卞熙琫は内務省の検閲に苦しめられることになる。

そして、一九二二年九月一日に発行された第三号から卞熙琫は編集兼発行人を辞し、金若水に委ねることとなつた。その理由は、第三号の編集後記によれば、卞熙琫がこれまで行ってきた事務的な仕事から離脱し、全力を著述に傾けるためであつたという。<sup>(20)</sup>このとき、卞熙琫は個人雑誌を発行する計画を立てており、その背景には間接的ではあるものの、コミンテルンとの接触があつた。

#### (4) コミンテルンの密使との接触

『大衆時報』が創刊された一九二二年五月頃といえ、コミンテルン執行委員会極東代表の朴鎮淳がモスクワ